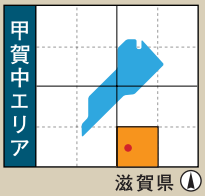
史跡
国指定

紫香楽宮跡（関連遺跡群）

しがらきのみやあと　かんれんいせきぐん

信楽町黄瀬他　大正15年10月20日指定



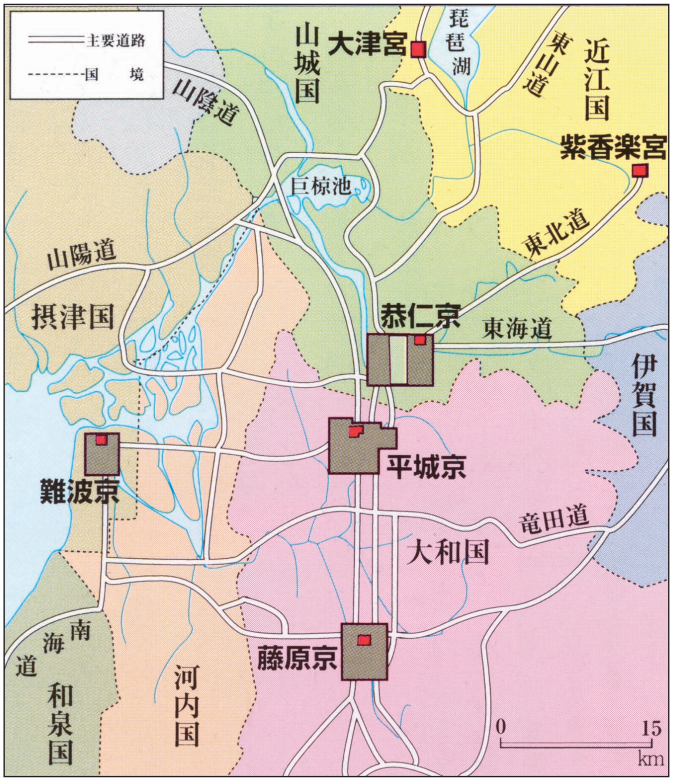
紫香楽宮は永らくその実態のわからない宮でした。聖武天皇の離宮として始まり、わずか3年余りの短命の宮であったことから、小規模な宮のイメージがありましたが、近年の相次ぐ発掘調査の結果、紫香楽宮は、聖武天皇の理想を実現するため、確固たる意志を持って造営された、堂々たる宮であることが明らかとなってきました。

当時のできごと	
740年	恭仁京に遷都
742年	紫香楽宮の造営を始める
744年	難波を都とする

聖武天皇と紫香楽宮

なぜ、甲賀郡の寒村信楽の地に、聖武天皇が都を遷したのか、明確な答は出ていません。しかし、最近行われた発掘調査の結果、これまでとは異なった聖武天皇像が浮かび上がり、これに基づき、紫香楽宮の造営の意味が考えられるようになってきました。

紫香楽宮造営に至る歴史的な背景を追ってみます。天平9年（737）長屋王を陰謀により廃し、古代政治の実権を握ったかに見えた藤原氏は、その指導者4人が相次いで天然痘に倒れ、かわり、橘諸兄が政権を握ります。これに対し、天平12年（740）苦境に追い込まれた藤原氏の藤原広嗣が、九州で乱を起こします。聖武天皇は、この乱から逃れるように平城京を出、東国を行幸し、遂に平城京に戻ることなく、山城の恭仁京に都を遷してしまいます。これまで、この聖武天皇の行動を「優柔不断」な聖武天皇の不可解な行動と解釈する意見が大多数でした。しかし、平成13年に、大津市膳所で行われた発掘調査で、この謎の行幸の最後に、聖武天皇が宿泊した「禾津頓宮（あわづとんぐう）」の跡と考えられる巨大な建物跡が発見されました。この建物は2面に廂（ひさし）を巡らした格式の高い、規模的にも、宮の正殿に匹敵するものであり、その建築には、相当期間を要したことがうかがえます。このことから、聖武天皇の東国行幸は、周到に計画されたものであることがわかってきました。また、行幸のコースは、聖武天皇の曾祖父に当たる天武天皇が、壬申の乱に際して進軍したコースと重なり、さらに行幸の最後に詣でた崇福寺（学習シートNo.005）は、天智天皇の勅願の寺です。このようなことから、聖武天皇は、藤原氏を始めとする、旧勢力間の政治抗争の激しい平城京を捨て、自分の政治的な理想を実現するため、確固たる決意の元に行動したのではないか、と考えられるようになってきました。そのために選択したのが、複都による日本の統治です。すなわち、政治的な首都を恭仁京とし、外交の都を難波の宮に置き、天皇が最も重視した仏教による精神的な充足の宮を紫香楽宮とした、と考えられます。信楽町内で行われた発掘調査の結果、聖武天皇が、並々ならない決意を込めて紫香楽宮を造営していたことが、徐々に明らかとなってきました。



古代の宮都の位置


禾津頓宮の主殿

紫香楽宮と甲賀寺

聖武天皇は、皇后の光明子とともに深く仏教に帰依し、混乱した世情を立て直すための、精神的なよりどころを仏教に求めました。天平13年（741）全国に国分寺を建立することを命じます。国分寺は、金光明最勝王経の教えにより、国が平安になることを祈り、あわせて政治的な平安も祈念するために建立されたものです。この他に、聖武天皇は仏教による治世の中心として、毘盧舎那仏（大仏）の建立を決意します。毘盧舎那仏は華厳経に説かれる、決して滅びることのない釈迦の教えを表した仏です。天平15年（743）紫香楽宮において「大仏像顕の詔」が出されます。この中で聖武天皇は「国中の銅をことごとく用いて毘盧舎那仏の大像をつくり、大きな山を削り仏殿を構えよう」と宣言しています。大仏を作る作業は、甲賀寺において直ちに始められ、翌16年には、大仏の中心となる体骨柱を建てるまで工事は進みました。この間、僧行基を迎え、大仏建立のための金品の寄付、一般民衆を事業へ参加させるための呼びかけなどを行ったようです。しかし、紫香楽宮の造営に反対する不穏な出来事が多発したため、大仏の建立は中断し、宮を平城に戻し、天平17年（745）に改めて奈良の東大寺において再開されます。

大仏建立が中断し、都が平城京に移った後も甲賀寺は存続し、一時近江国分寺として機能していました。



甲賀寺　金堂跡



甲賀寺　金堂跡

甲賀寺

現在、史跡紫香楽宮跡として指定をされているのが、甲賀寺の跡です。信楽町牧・黄瀬の丘陵上にあり「内裏野」「寺野」といった地名が残り、かつ古瓦や礎石があることから古くから注目されていました。大正15年（1926）に史跡に指定されていますが、この時点では、宮が、この場所にあったと考えられていました。しかし、昭和5年（1930）に行われた発掘調査の結果、この遺跡が、中門、金堂、講堂、三面僧坊、小子坊を一直線に配し、その東に塔と食堂（じきどう）を置く、東大寺に似た伽藍の寺院であることがわかってきました。

この時の調査は、礎石を掘り出し、その位置を確認するだけの調査でしたから、今見える遺構の年代について、詳しいことはわかっていません。現在残る金堂は2間×5間の身舎（もや）の4面に廂を巡らしたもので、その規模は、丈六仏（じょうろくぶつ）を安置するには、充分な大きさですが、聖武天皇が、壮大な決意の元に宣言をした「大仏」を安置するには小さすぎます。現在見られる伽藍の遺構は、宮が平城京に遷ってから整備された、国分寺の跡と考えることもでき、その下層に、甲賀寺の壮大な寺院遺構が眠っているかも知れません。今後の調査が期待されます。

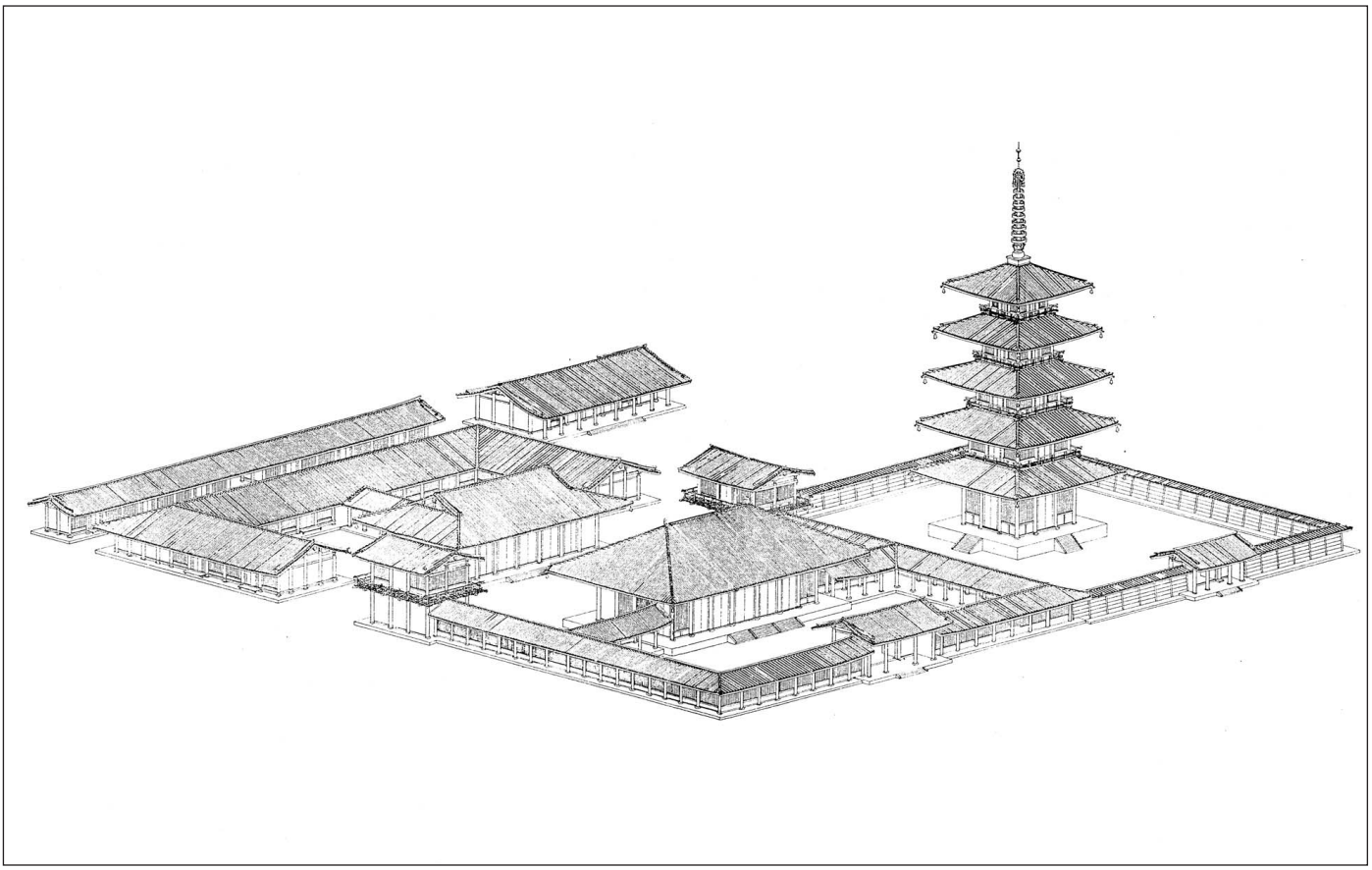
伽藍のほとんどの礎石が残っており、古代寺院の遺構としては、全国屈指の規模と残存状況を示しています。



甲賀寺　僧坊



甲賀寺　塔跡

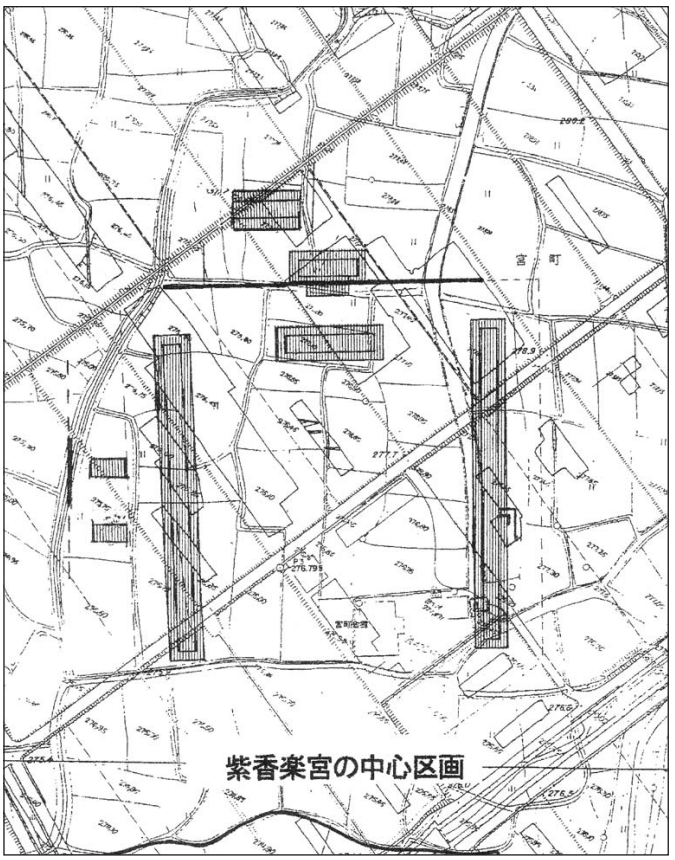


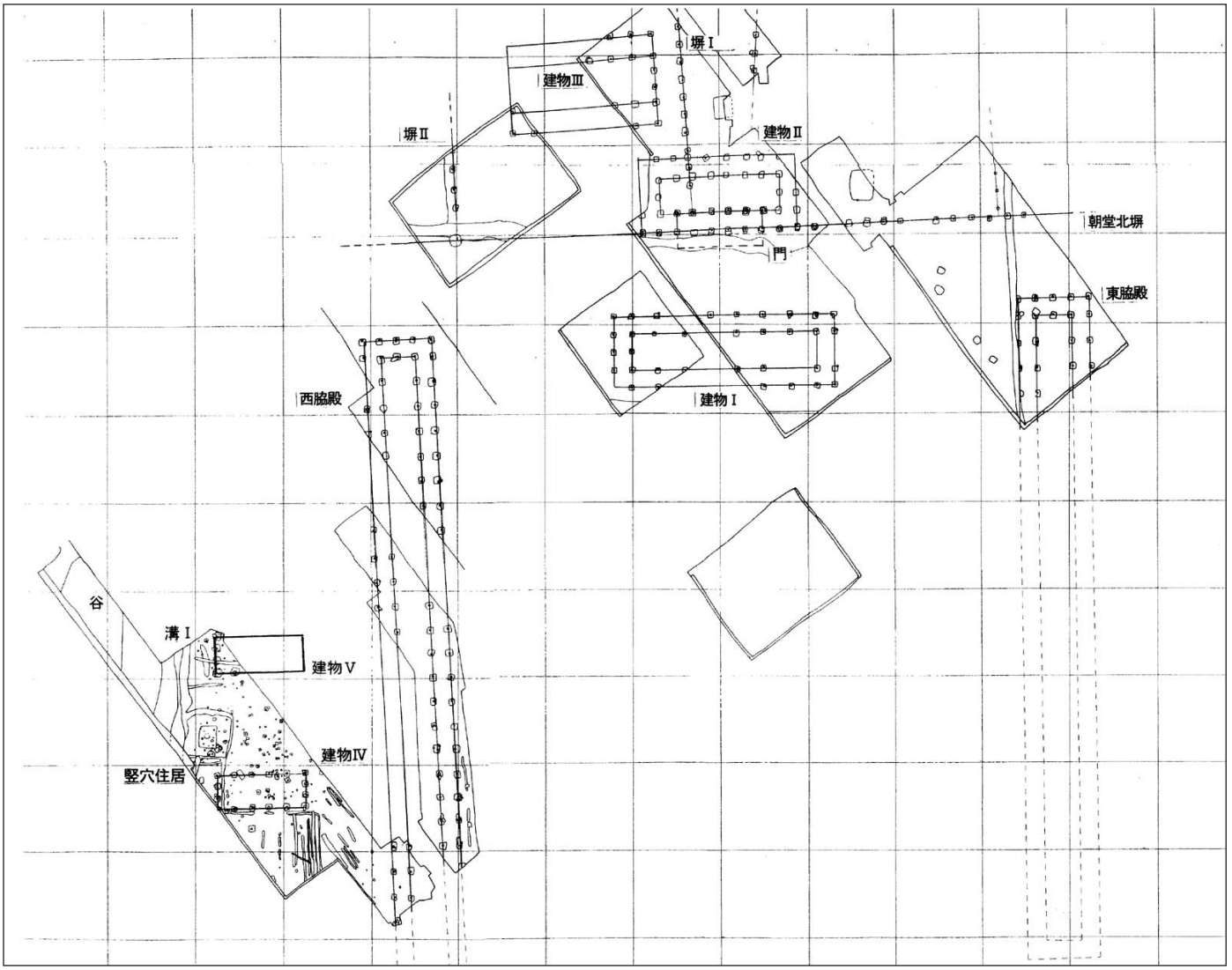
甲賀寺　復元図

宮町遺跡

昭和48年、甲賀寺より2㎞ほど北の盆地、宮町地区のほ場整備工事で、巨大な柱が出土しました。その後、昭和56年にこの柱の年輪を調べたところ、天平14年(742)に伐採された木であることが明らかとなり、にわかに宮町地区（宮町遺跡）が宮の候補地として注目されるようになりました。その後、信楽町教育委員会の手による、地道な調査の結果、昭和63年には奈良時代の大型の建物が、平成6年には大量の木簡が出土し、ますます宮町に宮があった可能性が高まり、ついに、平成12年に東西４間（11.8m）×南北が22間（91.5m）以上という、想像を絶する規模の建物跡が見つかりました。この建物は、宮の朝堂と考えられることから、この時点で宮町に宮があることが確定しました。その後の調査では、この長大な朝堂がもう一棟、さらに朝堂の間に東西に長い大型の建物が複数見つかり、ここが聖武天皇が政務をとった朝堂院であることが確定しました。

宮町遺跡からは大量の木簡が出土しています。中には、恭仁京への物資を紫香楽宮に回送したと推定される記録のあるものもあり、両者の関係を知る上で貴重な文字資料となっています。





紫香楽宮　朝堂院平面図



朝堂　東西棟遺構



朝堂全景



「近江」の名の見える木簡

鍛冶屋敷遺跡

鍛冶屋敷遺跡は、甲賀寺の東北約400mの丘陵の端にあります。平成12年から実施した発掘調査の結果、この遺跡が奈良時代の中頃（紫香楽宮の時代）の銅製品の鋳造遺跡であり、時代、立地から甲賀寺の造営に関する官営工房の跡であることが明らかとなってきました。

発掘調査では3段階の遺構が見つかっています。これらの遺構に時期差はほとんど見られず、銅製品の生産工程に合わせて、施設を造り替えていったものと考えられます。

まず、第1段階には、大型の掘立柱建物が建設されます。残念ながら、この建物の性格は現在のところ不明です。

第2段階には、中型の銅製品の鋳造が大規模に行われます。銅の鋳造には、原材料の置場、銅を溶かすための溶解炉、製品を鋳込むための鋳込み場、溶解炉の温度を高めるための送風施設（鞴：ふいご）が必要で、これらの施設が一つのセット（工房）となっている必要があります。これまで、全国の発掘調査で、このセットが同時に見つかった事例はありませんでしたが、鍛冶屋敷遺跡からは、13セット以上もの工房が、南北に規則正しく配置された状態で見つかりました。しかも、これらの工房では銅製品の鋳造のみを行っていることが明らかとなりました。

第3段階は、第2段階の工房を整地し、ここに大型の銅製品を鋳造する施設を配置しています。大型製品の鋳造施設は2カ所で見つかっており、1辺が約4m、深さ1m以上あり、梵鐘や、仏像の台座と考えられる製品を鋳込んでいたと考えられます。特に、梵鐘の鋳造遺構には梵鐘の中子（なかご：内側の鋳型）が残されていて、これを復元をしたところ、直径が1.5m、高さが2.1mになり、この鋳型で鋳造された梵鐘は、現存していれば、東大寺のものに次ぐ巨鐘となります。

また、「二竈領（にのかまどのうながし）」と書かれた墨書土器が出土しています。これは「2番目の工房の責任者」という意味で、たくさんある工房にそれぞれ責任者を配置し、計画的な生産を行っていたことがわかります。

鍛冶屋敷遺跡から発見された工房群は、これまで想像したこともない規模のもので、甲賀寺の造営に対して、聖武天皇が、並々ならぬ力を注いでいたことがわかります。



鍛冶屋敷遺跡全景（四角の大きな穴が大型製品の鋳造遺構）


復元された鋳型


梵鐘鋳造遺構

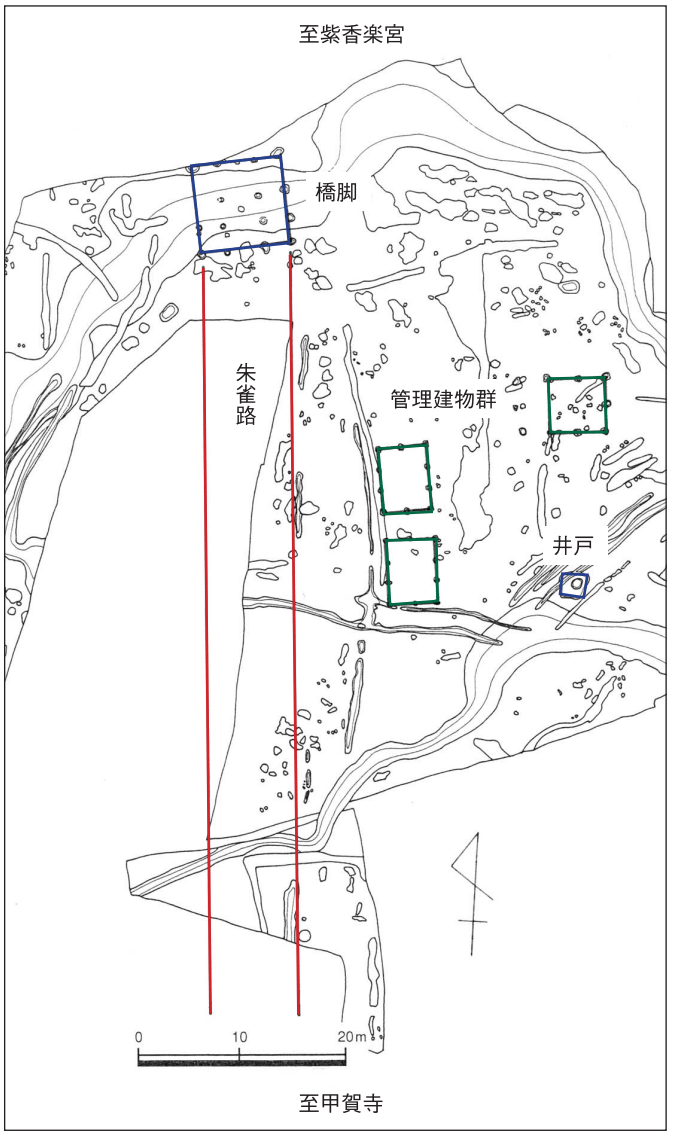

仏像台座鋳造遺構


工房の1セット　上部の細長い四角がフイゴ跡　中央が溶解炉　右下が鋳込穴

新宮神社遺跡

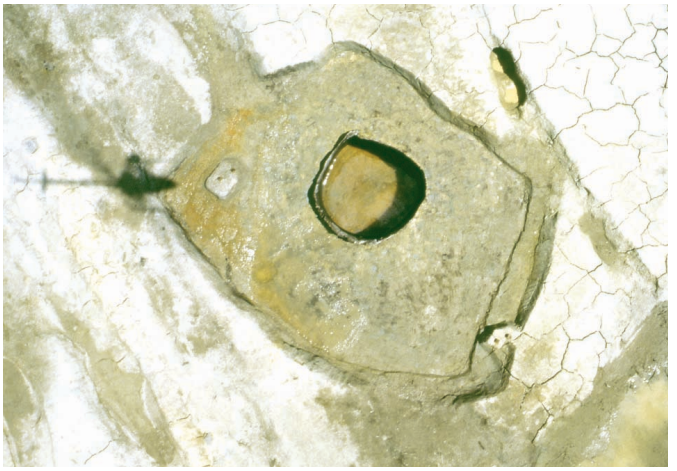
新宮神社遺跡は、甲賀寺と紫香楽宮（宮町遺跡）のほぼ中間にある遺跡です。平成12年に実施した発掘調査の結果、幅員が7mの道路遺構と、この道路に伴う橋脚の遺構などが見つかりました。出土した土器の年代から、これらの遺構は、紫香楽宮に関するものであり、その位置関係から、この道路は甲賀寺から真っすぐ北に延びる中央路（朱雀路：すざくろ）であると考えられます。道は、川を渡り東に折れ、尾根を開削して真っすぐに宮の朝堂院へと向かいます。見つかった橋脚は4間×4間で幅員は約7mと復元されます。古代の橋の「格」はその幅員で決まると言われています。ここから見つかった橋は、平城京で見つかった橋に匹敵する「格」といえます。橋と道の東からは、掘立柱建物が3棟と井戸の跡が見つかりました。これらの建物は、道や橋を管理するための施設と考えられます。

新宮神社遺跡から見つかった道路と、これに関連する遺構は、紫香楽宮の造営に際して、しっかりとした都市計画のあったことを示しており、この宮が計画的に作られたものであることを示しています。




新宮神社跡全景


管理建物跡


管理建物の井戸

北黄瀬遺跡（きたきのせ）

北黄瀬遺跡は、紫香楽宮の南西約1.5kmの所にある遺跡です。平成14年に実施した発掘調査の結果、巨大な井戸が見つかりました。井戸は、一辺が2mの正方形で、厚さが10cmもあるヒノキの板で囲われています。地下水位が高いため井戸の深さは約80cmしかありません。井戸の内部には小石が敷き詰められています。井戸のすぐ西には、ヒノキ、スギの厚い板を井戸の深さより深く埋め込み、井戸に溜まった水の流出を防いでいます。また、この井戸を囲うように2間×3間の建物が配されています。井戸の板の年輪を測定したところ、この板は、天平15年（743）に伐採された木材から作られていたことが、わかりました。

発掘調査では、井戸以外の施設を見つけることができませんでしたが、この規模の井戸は、平城京では、造酒司（ぞうしゅし）、大膳職（だいぜんしき）などの水を大量に用いる役所に設置されるものであり、今後この近辺から、このような官衙の跡が見つかることが予想されます。

また、宮からかなり離れた場所にも、官衙が配置されていたことが明らかとなったことから、紫香楽宮の範囲は、従来考えられていた範囲よりも、広大なものである可能性が高まりました。



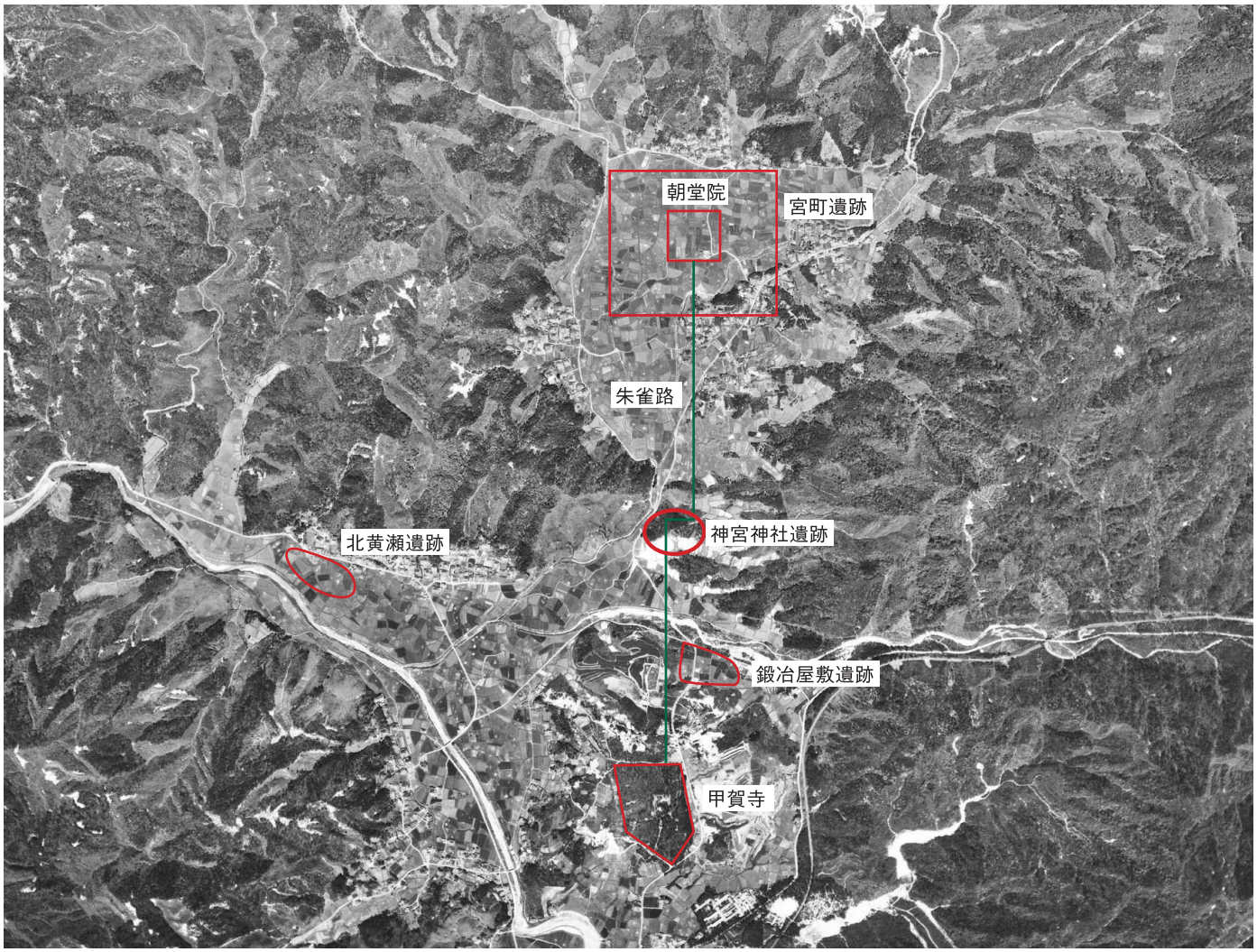
井戸全景



井戸と水溜め板の発掘調査状況



発掘された井戸



紫香楽宮関連遺跡群

最近行われた発掘調査の結果、紫香楽宮は宮単独で機能していたのではなく、甲賀寺と密接な関係があり、かつしっかりとした都市計画の元で作られていたことが明らかとなってきました。しかし、宮や寺を造営するために必要な瓦窯、木工所、鉄製品の製作所、これらの工房で働く工人や、官衙で働く役人の住居、そして何より続日本紀に見える大仏の「体骨柱」の跡が見つかっていません。信楽のどこかにこれらの遺跡がまだまだ眠っています。

関連する文化財

恭仁京跡 （京都府加茂町）	聖武天皇が一時都を置く。紫香楽宮、難波宮と共に複都を構成
後期難波宮跡 （大阪府大阪市）	聖武天皇が一時都を置く。紫香楽宮、恭仁京と共に複都を構成
平城京跡 （奈良県奈良市）	710年から787年までの間の都。あおによし奈良の都
膳所城下町遺跡 （禾津頓宮跡）	聖武天皇の頓宮の遺跡。膳所城下町遺跡と重複する

もっと深く知りたい

信楽町教育委員会	☎0748-82-8155	甲賀郡信楽町長野1203
滋賀県埋蔵文化財センター	☎077-548-9681	大津市瀬田南大萱町1732-2
平城京資料館	☎0742-32-3931	奈良市二条町2-9-1

紫香楽宮関連遺跡群へのアクセス

ＪＲ琵琶湖線　石山駅下車
信楽高原鉄道　紫香楽宮址下車



【参考文献】〔図説日本の史跡〕同朋舎　〔宮町遺跡発掘調査報告書〕信楽町教育委員会　〔新宮神社遺跡発掘調査報告書〕滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月